The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方言敬語動詞に共通して生じる意味領域の変化
Author(s)	水谷, 美保
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2004, 38, p. 17-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56468
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

方言敬語動詞に共通して生じる意味領域の変化

水 谷 美 保

1. はじめに

日本語の尊敬語には「イカレル」のような分析的な形式と「イラッシャル」のように語彙的に置き換えられ、複数の意味を表し分ける敬語動詞という形式がある（以下「敬語動詞」とし、その意味に触れる際にはすべて尊敬語の意とする)。このような敬語動詞は通時的にも、上代では「イマス」中古では「オワス」中世には「オリャル」「オジャル」近世には「ゴザル」「オイデル」などがあったとされている（山崎1963、辻村1968など)。これら敬語動詞はかつて〈行く、来る、いる〉を表したとされ、同形式が現代でも方言に存在している。

本稿の目的は、筆者隣地調査の結果をもとに複数の方言敬語動詞「オイデル」「ゴザル」「ゴザンス」「オザル」「ミエル」「イリャース」の6形式を対照させる。そしてそこに共通して起きている変化を指摘することにある。

共通する変化とは、過去に〈行く、来る、いる〉あるいは〈来る〉のみだった敬語動詞の意味領域が、拡大または縮小して〈来る、いる〉となっていることである。そしてその意味領域内に〈行く〉は含まれないことである。このような変化が複数の形式に揃って生じているのである。

2. 先行研究

これまで方言敬語動詞は「どこに行くのか」「お前もこないか」のような調査文において、他の待遇表現の形式とともに、尊敬語形式のバリエーションの一形式として取り上げられることが多かった。

そのため敬語動詞に注目した研究は非常に少ない。そして敬語動詞に関する記述があっても意味に注目しているものは、ほとんどなく「オイデルいらっしゃる」のような記述にとどまることが多い。このような記述では、その敬語動詞が実際どのような意味を表すのかわからない。方言の敬語動詞について個別に述べているものはある（神部1959、仲宗根1975など）。しかし本稿のように臨地調査の結果をもとに、複数の方言敬語動詞を対照させ、そこに共通する変化を取り上げた研究は管見の限り見当たらなかった。

3. 方言敬語動詞の全国分布

〈行く、来る、いる〉を敬語動詞で表す地点の分布を図１に示した[1)]。これは国立国語研究所が1977年（昭和52年）に方言文法全国地図作成のために行った準備調査161地点分のカードデータを整理し、作成したものである[2)]。調査文は以下の通り。

196	Ａさんに「今日は［家にいるか］」と聞くとき，「家にいるか」のところをどのように言いますか。
197	Ａさんに「あしたも［ここに来るか］」と聞くとき，「ここに来るか」のところをどのように言いますか。
198	Ａさんに「［どこに行くか］」と聞くとき，どのように言いますか。

図１から敬語動詞は主に東北、中部、中国、四国、九州、沖縄、八丈島に分布していることがわかる。そして福島、新潟、近畿には分布が薄いこともわかる。ここから敬語動詞の意味に注目し、全国的な分布の傾向を見

て行きたい3)。

四国、山口、九州南部、沖縄、八丈島の各地方には〈行く、来る、いる〉の尊敬語として敬語動詞が回答される傾向がある。そして東海、北陸地方では〈来る、いる〉の意味で敬語動詞が回答されることが多い。近畿地方には敬語動詞の分布が薄い。これは当地でハル敬語のような分析的形式がさかんに使われていることとの関連が考えられる。

次に意味ごとの分布を見る。図2は〈行く〉の場面で敬語動詞が回答された地点をここから〈行く〉を敬語動詞で表す傾向が見られるのは東北、四国、九州を示したものである。中心とする中央から離れた地域であることがわかる。

図3は〈来る〉で敬語動詞が回答された地点である。図1と照らし合わせると、〈行く、来る、いる〉のなかで地点を問わず分布しているのが〈来る〉であることがわかる。

図4は〈いる〉を敬語動詞で回答した地点である。東北地方で分布がうすい。〈行く、来る〉では使用が見られない近畿、山陰において〈いる〉の場面では敬語動詞の若干の使用が見られる。

これら地域のなかから多様な形式の分布を見せ、談話資料などから敬語動詞が使われていると予想した愛知県、岐阜県を中心に臨地調査を行った。そしてその他の方言として、隠岐島においても調査を行った。

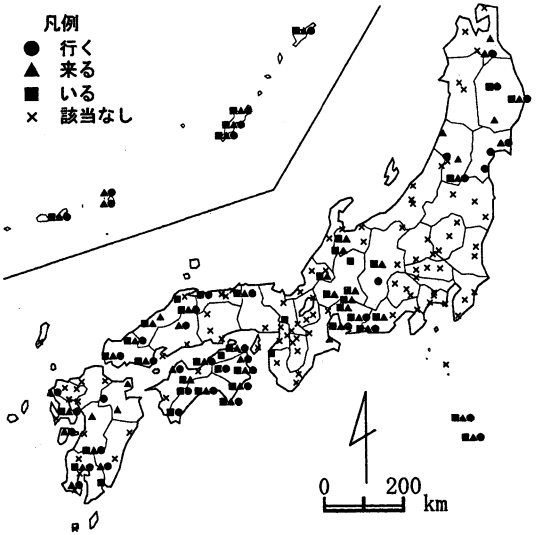

図1　〈行く〉〈来る〉〈いる〉の方言敬語動詞分布総合図

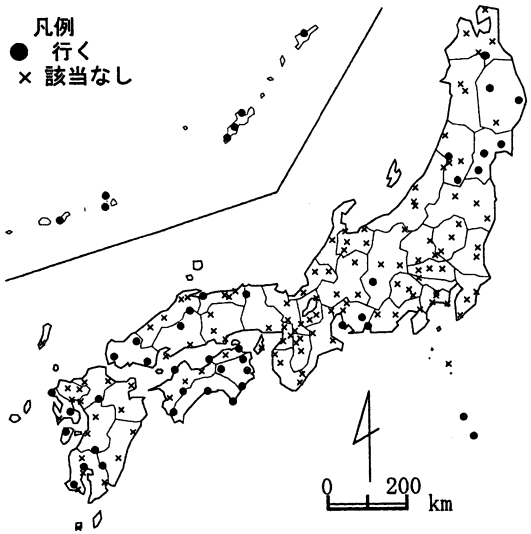

図2　〈行く〉を表す方言敬語動詞

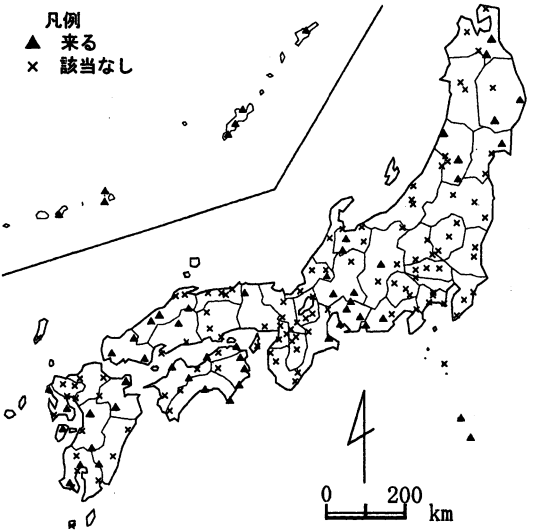

図3　〈来る〉を表す方言敬語動詞の分布

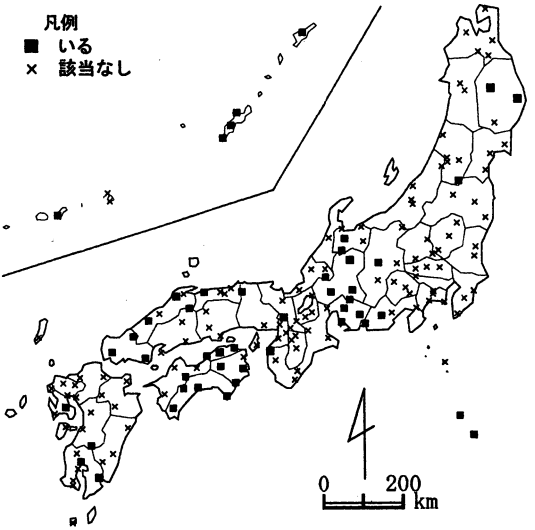

図4　〈いる〉を表す方言敬語動詞の分布

4. 方言敬語動詞

筆者は「オイデル」「ゴザル」「ゴザンス」「オザル」「ミエル」「イリャース」の6形式について、表す可能性のある〈行く、来る、いる〉のうちどの意味を表すのか、どの意味を表さないのかについて臨地面接調査を行った。調査地点は図5に示した4地点である。

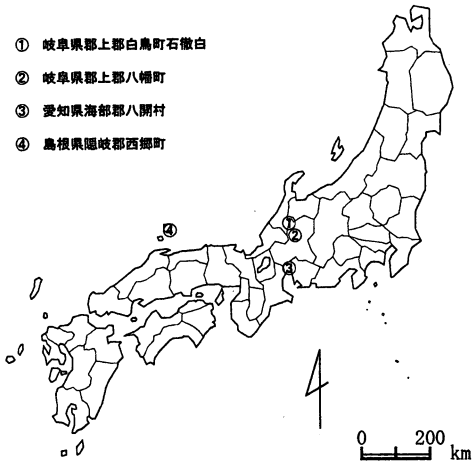

図5　調査地点

4.1 オイデル

「オイデル」は近世期上方では〈行く、来る、いる〉の意味を持っていたとされている（山崎1963）。上方、江戸以外でも江戸期名古屋を舞台にした洒落本において「オイデル」に〈行く、来る、いる〉の例が見られる（使用例は水谷2003参照）。そこで筆者は岐阜県郡上市八幡町において、「オイデル」に関する調査を行った。

「オイデル」：2004年8月調査　NS　調査時84歳

（0～84岐阜県郡上郡八幡町[4]）結果は以下のようである。

表1　「オイデル」の意味領域

		行く	来る	いる
NS	非過去 過　去	イキナレル イキナイタ	オイデル オイデタ	オイデル オイデタ

（1）　＊おどりには　オイデルかな　「＊」は非文の意（以下同様）

→（2）　おどりには　イキナレルかな　〈「おどりには行くか」〉

（3）　明日10時ごろはオイデルかな　〈「10時ごろはいるか」〉

（4）　もうすぐ、田中さん　オイデルンかな　〈「田中さん来るのかな」〉

表1から〈来る、いる〉は「オイデル」で表される。しかし〈行く〉の意で「オイデル」は非文であり代わりに「イキナレル」という分析的な形式が用いられる。野田ほか編（1959）は郡上方言の「オイデル」について詳細に記述している（以下抜粋）。

> オイデルは共通語の「いらっしゃる」「おいでになる」に相当する動詞で、特に「おいでになる」とは意味の上からも、形の上からもよく似ているが、両者は必ずしも一致しない。
>
> 「おいでになる」は、いる、来る、行くなどそれぞれの意味を持つのに対し、オイデルは、いる、来るの意味だけであって、行くの意はない。たとえば、
>
> お客さんがオイデル。
>
> といえば、それはお客が来ることか、あるいはお客が現に来ていることかいずれであって、お客が行くの意味はないのである。

このように中央語や江戸時代の名古屋方言で〈行く、来る、いる〉の意味を持っていたと考えられる「オイデル」は1950年代の郡上方言ではすでに〈行く〉を意味しないと、はっきり記されている。このように当該地域の「オイデル」は〈来る、いる〉を意味領域にしており〈行く〉は別形式で表されるのである。

4.2 ゴザル

「ゴザル」は山崎（1963)、湯澤（1981）において近世期の上方、江戸に見られる例から〈行く、来る、いる〉の意味の尊敬語だとされている[5)]。調査地方言が影響を受けたであろう江戸期名古屋における洒落本においても「ゴザル」に〈行く、来る、いる〉の例が見られる（例は水谷2003参照)。そこで愛知県海部郡八開村において、「ゴザル」に関する調査を行った。その結果が以下表2である。

「ゴザル」：2002年1月調査　HM　調査時76歳　農業

(0～25愛知県津島市、25～現在愛知県海部郡八開村)

表2　「ゴザル」の意味領域

		行く	来る	いる
HM	非過去 過　去	イキャース イキャータ	ゴ ザ ル ゴザッタ	ゴ ザ ル ゴザッタ

（5）　＊先生はこれから東京にゴザル

→（6）　先生はこれから東京へイキャース　〈「東京へ行く」〉

（7）　先生はここには1時にゴザルよ　〈「ここには1時に来るよ」〉

（8）　今、先生の家に行ったけど、ゴザッタよ

〈「先生の家に行ったけどいたよ」〉

表2の「ゴザル」は〈来る、いる〉を意味するが、〈行く〉は「イキャース」で表される。

「ゴザル」の語源は〈いる〉を意味する「御座ある」である。そこから意味領域を拡張させ〈行く、来る〉の意味も表すようになった。しかし現在「ゴザル」は調査地方言において〈来る、いる〉を意味するものの、〈行く〉については、表2のように分析的形式が用いられる。つまり意味領域が縮小しているのである。

藤原（1978）でも「尾張・美濃地方においても「行く」ことに「ゴザル」

を言うほどの、利用のはばはなさそうである。」（全国の「ゴザル」について）「用法上では、いちばんに、「行く」に「ゴザル」を言うことが弱まってきたようである。ついで、「来る」「居る」に「ゴザル」を言うことがすくなくなりつつある。」とされている。ここから「ゴザル」が〈来る〉〈いる〉を意味領域とし〈行く〉を別形式で表すのは本稿の調査方言だけではなく他の方言においても同様であることがわかる。

4.3　ゴザンス

愛知県、岐阜県だけではなく離れた地点の敬語動詞についても調べたのが本節の「ゴザンス」である。『日本国語大辞典　第二版』において尊敬語の「ゴザンス」は〈行く、来る、いる〉の意だとされている。

「ゴザンス」：2004年８月調査　MT　調査時95歳

（0～12島根県隠岐郡西郷町、12～13京都府京都市、13～18島根県隠岐郡西郷町、18～20京都府京都市、20～現在島根県隠岐郡西郷町）

表３　「ゴザンス」の意味領域

		行く	来る	いる
MT	非過去 過　去	イカッシャンス イカッシャンシタ	ゴザンス ゴザンシタ	ゴザンス ゴザンシタ

（９）　＊どこへ　ゴザンスカノ

→(10)　どこへ　イカッシャンスカノ　（「どこへ　行くのか」）

(11)　明日も　ここへ　ゴザンスカノ　（「明日もここに来るか」）

(12)　昼から　家に　ゴザンスカノ　（「午後には家にいるか」）

このように〈来る、いる〉を意味領域としている敬語動詞は、本稿で調査の中心地域とした愛知、岐阜ばかりではなく日本海側の離島である隠岐島にも見られることがわかる。

4.4 オザル

藤原（1978）、秋田県教育委員会編（2000）によれば「オザル」の語源は「オジャル」であり秋田、福島、岐阜、大分、鹿児島などに分布しているとある。「オジャル」の語源は「お出である」だとされ、〈行く、来る、いる〉の尊敬語だとされている（『日本国語大辞典　第二版』「オザル」の項）。「オザル」が中央で使われていた例も見られる。

てうじやへ　ばっかし　おざるから、とこなつさんが腹ァつったつも
（滑稽本　東海道中膝栗毛[6]）

野田ほか編（1959）は岐阜県郡上郡の「オザル」が〈来る、いる〉を表すとしている。そこで筆者も調査を行った。

「オザル」：2004年6月調査　SU　調査時77歳　農業

（0～16福井県大野郡石徹白村[7]、16～20京都府舞鶴市、16～現在岐阜県郡上市白鳥町石徹白）

表4　「オザル」の意味領域

		行く	来る	いる
SU	非過去	イカサル	オザル	オザル
	過　去	イカサッタ	オザッタ	オザッタ

(13)　＊ドコエ　オザルケー

→(14)　ドコエ　イカサルケー　（「どこに行くのか」）

(15)　明日ココへ　オザルケ　（「明日ここに来るか」）

(16)　明日の午後は、家にオザルケ　（「明日の午後は「家にいるか」」）

表4から「オジャル」の変異形「オザル」は語源が「お出である」と移動の意がありながら、調査地方言の意味領域は〈行く〉を表さず〈来る、いる〉であることがわかる。

4.5　イリャース

「イリャース」の意味に触れる前に、まず語源や分布について説明したい。尊敬語形式「動詞の連用形＋ヤース形」は愛知県尾張地方を中心に分布している（彦坂1988）。「イリャース」は、過去に「入る（いる）」[8]が使用されていたときに「ヤース」が接続し、現在は語彙的なものとして固定し、一語として敬語動詞になった形式と考えられる。この「イリャース」の調査結果を表5に示す。

「イリャース」：YM（4.5「ミエル」参照）、HM（4.2「ゴザル」参照）

表5　「イリャース」の意味領域

		行く	来る	いる
HM・YM	非過去 過　去	イキャース イキャータ	イリャース イリャータ	イリャース イリャータ

(16)　＊お父さん　どこ　イリャータ

→(17) お父さん　どこ　イキャータ　〈「どこへ行ったのか」〉

(18)　いつ　うちに　遊びに　イリャース　（「うちに遊びに来るのか」）

(19)　おみゃーさん　今まで　どこに　イリャータの

（「どこにいたのか」）

この「イリャース」も〈来る、いる〉を表す尊敬語形式であることが表5からわかる。「イリャース」がかつて〈行く、来る、いる〉を表したかどうかは、先行研究や洒落本、方言集などに当たってみたが、今のところわからない[9]。しかし中央から伝播した形式ではなく尾張地方を中心とする地域でのみ分布している敬語動詞が、他形式と同じように〈来る、いる〉を表し〈行く〉が分析的な形式で表されているのは興味深いであろう。

4.6　ミエル

現在、尊敬語「ミエル」は標準語的な意味は〈来る〉のみである。これ

は江戸時代の江戸ことばについての先行研究でも同様の記述がある（湯澤1981）。しかし筆者の調査した方言では、敬語動詞「ミエル」は方言レベルで意味拡張を起こし、標準語的な〈来る〉のほか〈いる〉そして「シテミエル」となって〈している〉の意味も表す。

「ミエル」：2002年調査　YM　調査時72歳　農業

（0～3愛知県海部郡佐織町、3～現在愛知県海部郡八開村）、HM（「ゴザル」の項参照）

表6　「ミエル」の意味領域

		行く	来る	いる
HY・HM	非過去 過　去	イキャース イキャータ	ミエル ミエタ	ミエル ミエタ

(20)　＊これからどこ　ミエルのー

→(21)　これからどこ　イキャースのー　〈「どこへ行くのか」〉

(22)　先生は風邪ひいてるで、学校にはミエンで　〈「学校には来ない」〉

(23)　先生は30分前から隣の部屋にミエルよ　〈「隣の部屋にいる」〉

このように当該方言の敬語動詞「ミエル」は〈来る、いる〉を意味領域とし〈行く〉は表さない。〈している〉の意味で「シテミエル」という形式が用いられるのは、愛知県、岐阜県、三重県を中心に広い分布がある（岸江ほか2001・江端1998）。しかし名古屋を舞台とした洒落本からは〈行く〉の例は見つからなかった[10]。江戸時代の洒落本中心に名古屋方言を記述した芥子川（1971）においても「「行く」の用例は見当たらない」とされている。

このように「ミエル」が過去に〈行く〉として用いられた例は、見当たらない。ここから、かつて「ミエル」は〈行く、来る、いる〉の意味領域であったものが現在〈来る、いる〉に縮小したのではなく、〈来る〉だけだった意味領域が〈いる〉へ拡張し、現在の意味領域になったと考えられる。

そして本稿で取り上げた他の形式「オイデル」「ゴザル」「ゴザンス」「オザル」「イリャース」はそれぞれ動作主（被敬者）の動作を描写した語である。しかし「ミエル」は話し手の視覚に動作主が入る意が転用されて敬語となった動詞である（辻村編1991）。そのために視界に入るという意から類推され〈いる〉へ意味を広げた。しかし〈行く〉は必ずしも、動作主が話し手の視界に入るとは限らない。つまり話し手の視界に入らない〈行く〉には、当該地域の方言レベルでも意味を広げていかなかったものと考えられる[11]。

このように「ミエル」が方言レベルで〈来る〉から〈いる〉へと意味を広げながら、〈行く〉に拡張していないことは〈来る〉と〈いる〉の結びつきの強さを表していると言えよう。

5. 変化の要因

ここまで見てきたなかで、本稿で取り上げた4地点、6形式の方言敬語動詞はそれぞれ、現在〈行く〉を表さず〈来る、いる〉を意味領域とする点を共通させていることがわかる。本節ではなぜこれら方言敬語動詞が〈来る、いる〉を同形式とし〈行く〉をその意味領域に含めていないのか、その要因を考察する。

この敬語動詞に共通して生じている変化要因は様々な点が考えられるが、主なものとして〈行く〉と〈来る〉〈いる〉の視点の置き方の違いにあると考えている。久野（1978）は「話し手が動く主体でない場合」の〈行く〉と〈来る〉の違いについて、次のように指摘している。

> 「来ル」　発話の時点、或いは動きの動作の起きる（起きた）時点に到達点にいる（いた）（動きの主体以外の）人に話し手の視点が接近している時用いられる。
> 「行ク」　その他の場合に用いられる。

〈来る〉は話し手自身の視点を移動先（話し手の領域であることが多い）である「到達点」という限定したところに置くことができる動作である。一方、〈行く〉は話し手の視点の位置は「その他の場合」という広い範囲であり、動作主（被敬者）の移動先も場面に依らなければ分からないことが多い。

このように視点の置き方の違い、移動先の場面依存度の差が要因となり、同じく移動を表す〈行く〉と〈来る〉のうち、〈来る〉が意味領域のなかで優位になった。そして〈いる〉は移動を表さないために、〈行く〉と〈来る〉のような対立のなかになく、意味領域内に維持されている。

これらの違いが変化にあたって最初の要因となり、かつて〈行く、来る、いる〉という意味領域だった敬語動詞は、〈行く〉が分析的な形式となり、現在の〈来る、いる〉の意味領域となった。そして標準語的な意味は〈来る〉だけだった「ミエル」は、視点の位置を固定できる〈いる〉までは当該方言レベルで拡張したものの、〈行く〉には拡張していかなかったのであろう。

6. おわりに

本稿では国立国語研究所のデータを整理し、敬語動詞の全国的な分布傾向を概観した。そして愛知県、岐阜県、島根県隠岐島をフィールドに「オイデル」「ゴザル」「ゴザンス」「オザル」「イリャース」「ミエル」を調査し、これら方言敬語動詞は〈来る、いる〉を意味領域としているが、〈行く〉は表さないということを示した。これらの敬語動詞は各項で記したようにそれぞれ語源が異なる。そして、現在の意味領域に至るまでの経緯も異なる。このような語源、変遷の違いがありながらも、本稿で取り上げた敬語動詞は、意味領域を縮小あるいは拡大させつつ〈行く〉を表さないという方向へ共通して変化しているのである。

このような変化は同様に、標準語の地位にある「イラッシャル」にも当てはめることができる（「イラッシャル」には〈行く〉を表さなくなりつつある変化傾向が見られる。「イラッシャル」の変化については水谷（2003、2004）を参照のこと。）

このように各地に見られる敬語動詞は待遇表現の一形式であるというだけでなく、異なる形式間に共通した変化を見せる形式であることを示した。

今後の課題としては第一に同様の変化が見られると予想される敬語動詞の意味記述をすすめて行きたい。盛岡の「オデァル」、壱岐「ゴザル」などが〈来る、いる〉を意味領域としているという部分的な報告が見られる。そして山形の「ゴザル」〈行く、来る〉（遠藤1997）などの意味領域だとされている敬語動詞も変化が一方向に限らないことを示すため記述したい。そして敬語動詞は本動詞で表される意味が、補助動詞になった場合、命令形の場合でも維持されるのかなどの構文、文タイプにより変化に段階があることが予想される。こうした敬語動詞の変化パターンを記述し、敬語動詞の変化過程を導き出して行きたい。

注

1）準備調査では〈行く、来る、いる〉の意味ごとに調査文が設定されているが、ここでは3つのうちいずれかの意味が現れた際には、その地点にプロットした。なお北海道は敬語動詞の分布が見られなかったため紙幅の関係もあり省略する。そして本稿は「方言敬語動詞」と限っているので、「イラッシャル」「オイデニナル」「オイデデスカ」等の標準語形が回答された場合、「該当なし」扱いとした（「オイデマスカ」「オイデルデスカ」は方言敬語動詞扱いとした）。

2）本調査800地点においても以下の項目は加えられている。方言文法全国地図第6集（平成16年度刊行予定）にて掲載される。

3）注意したいのは、これら3つの調査文は敬語動詞に注目するために設定されたものではない。そのため仮に一つの意味で敬語動詞が回答されていたとしても、その敬語動詞がその他の意味で使われないということではな

い。しかし等しい条件の下に、敬語動詞が回答された方言として分布傾向を見出すことはできるであろう。

4) 岐阜県郡上郡八幡町は2004年3月に近隣町村と合併し、郡上市となった。この部分では郡上郡八幡町と記した。

5) 湯澤(1981)では近世後期の江戸を舞台して書かれた小説、歌舞伎脚本、落語などの文学作品のなかに見られる「ゴザル」について、〈行く〉の例が少ないとしている。

6) 『日本国語大辞典』「オザル」の項より抜粋。

7) 福井県大野郡石徹白村は昭和33年に越県合併し、岐阜県郡上郡白鳥町となる。そして2004年3月に近隣町村と合併し、岐阜県郡上市白鳥町石徹白となった。

8) 『日本語文法大辞典』では「入る(いる)」について「室町時代では「お入りある」「いらせ給ふ」「いらせらる」「御いり候」「いらしむ」などの形で、「行く」「来る」「居る」の意味を表す尊敬語の用法が生じた」としている。

9) かつての「入る」が調査地方言で〈行く、来る、いる〉を表した例は今のところ名古屋に関する過去の文献などにあたっても見られない。そして調査地方言の存在動詞は「イル」ではなく「オル」である。そのために存在の「イル」に「ヤース」が接続して「イリャース」なり、それが意味拡張したとは考えにくい。

10) 参照した洒落本12編からは〈いる、している〉の例も見当たらなかった。

11) 「ミエル」が現在でも語源の影響がある要因として、「ミエル」は〈見ることができる〉という可能の意味で使われることが挙げられる。

【引用文献】

秋田県教育委員会編 (2000)『秋田のことば』無明舎出版

江端義夫 (1998)「新しい敬語の補助動詞「～テミエル」が保守的な共通語と抗争する方言戦略」『国語教育研究』第41号 広島大学光葉会

遠藤仁 (1997)「県内各地の敬語」平山輝男編者代表『日本のことばシリーズ 6 山形県のことば』明治書院

神部宏泰 (1959)「隠岐島五箇方言の「ゴザル」について」『國文學攷』第22号 広島大学国語国文学会

岸江信介 (代表)・太田有多子・武田拓・中井精一・西尾純二・半沢康 (2001)『名古屋 ── 伊勢間グロットグラム集』近畿方言研究会

久野暲 (1978)『談話の文法』大修館書店

芥子川律治（1971）『名古屋方言の研究』名古屋泰文堂
辻村敏樹（1968）『敬語の史的研究』東京堂出版
辻村敏樹編（1991）『敬語の用法』角川書店
仲宗根政善（1975）「宮古および沖縄本島方言の敬語法 ──「いらっしゃる」を中心として ──」九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄 ── 自然・文化・社会 ──』弘文堂
野田直治ほか編（1959）「郡上方言の敬語表現」『郡高四十年史』岐阜県郡上高等学校
彦坂佳宣（1988）「愛知県方言の分布と歴史ノート（4）── いわゆる身内敬語について ──」『名古屋・方言研究会会報』第5号
彦坂佳宣（1997）『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院
藤原与一（1978）『昭和日本語方言の総合的研究　第一巻　方言敬語法の研究』春陽堂
水谷美保（2003）「敬語動詞の意味縮小「イラッシャル」「オイデル」「ゴザル」「ミエル」」『日本方言研究会　第77回　研究発表会　発表原稿集』日本方言研究会
水谷美保（2004）「「イラッシャル」「イラッシャイ」の意味領域の縮小」『日本語学会2004年度秋季大会予稿集』日本語学会
山口明穂・秋本守英編（2001）『日本語文法大辞典』明治書院
山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院
湯澤幸吉郎（1981）『増訂 江戸言葉の研究』明治書院
龍川清・佐藤忠彦（1983）『会津方言辞典』国書刊行会

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

Common Changes of Semantic Field in HonorificVerbs of Japanese Dialects

Miho MIZUTANI

Honorific verbs, which have plural meanings in each form, have existedin Japanese anguage from ancient times to present age. However, little study have focused on their historical changes.

This paper points out that honorific verbs *oideru, gozaru, gozansu, ozaru, and mieru,* which used to mean 'go/come/be' in the Edo and Kyoto dialect of classical Japanese, underwent common changes of semantic field that expand or narrow their meanings to 'come/be' in contemporary dialects. The factor of this change can be explained by viewpoint.

Although 'go' and 'come' means movement, only 'come' can fix its viewpoint on goal, and has precedence over 'go', which shifts its viewpoint according to the situations. 'be', on the other hand, means stationary state and doesn't confront with 'come' as 'be' doesn't need to shift its viewpoint. Therefore both 'be' and 'come' can coexist in each honorific verb.

キーワード：honorific verbs, semantic field, common changes, Japanese dialects